



# 朽ち果てたバス停



fujisyun

僕は隣町へ歩いている。  
片側二車線の道の中心を。  
もう整備する者もないアスファルトはひび割れ、表面を砂埃が薄く覆っている。  
道の両端に並んでいる家も、崩れていないもののほうが少ない。  
背中に背負っているズタ袋の中に入っているたくさんの手紙が、歩くたびにカサカサと音を立てる。

僕は郵便配達人だった。  
こんなご時世、郵便配達人や隣町へ物資をとどける運送会社は危険な仕事だったが、高給取りだった。  
町から町へ渡り歩くのはいつも野盗の危険が伴う。彼らを取り締まる法や警察は僕が生まれた頃にはもうなくなってしまっていた。  
僕はズタ袋の他に、数日分の水や食料の入った背嚢、そしてライフルを背負っている。

その町で出た手紙を、徒歩でとなり町、更に遠い町まで届ける。何日もかかることがある。  
早く届けることは重要ではない、確実に届けることが重要なのだ。  
僕が運んでいる手紙は野盗には何の価値もないけれど、それをしたためた人、受け取る人にはとても大切な物だった。  
僕が生きる時代は、便りがあるということだけで本当に喜ばしい時代だった。

僕は手紙を運ぶ。  
人と人をつなぐのだ、という使命感とちょっとばかり高い給料に突き動かされて。

僕がよく使うルートは、かつてこの地域で運行していたであろう路線バスのルートに沿ったものだった。  
僕が見たことのない、バスがちゃんと人を乗せて、時間通りに来ていた時代に対するノスタルジーを感じることができる、お気に入りの道。  
平和な人々の暮らしはどんなものだったのだろう。  
その一端をかつて使われていたバス停が語ってくれるような気がした。

## 「森 二 目」

前方遠くに陸橋が見える道に位置するバス停の名前だった。陸橋は蜃気楼で霞み、距離感が掴みにくい。  
僕は簡単な字しか読めないし書くことは尚更できない。なんと読むのだろう……。  
メモを取り形を真似て書いてみる。帰ったら誰かに聞いてみよう。  
バス停は昔この土地についていた名前を語ってくれる。もう誰も使うことのないこのバス停のよ

うに、錆つき風化してしまった名前。

バス停は地名が刻まれた平和な時代の墓標だった。

太陽が真上から照り付けている。

あのバス停から30分は歩いたろうか。

2つのバス停を通り越し、これが3つ目。

蜃気楼で霞んでいた陸橋がだいぶ近くに見えるようになった。

陸橋にはまるで渋滞しているかのように、大量の車が規則正しく停まっている。

渋滞の列が錆びついた車で構成されている光景はいつ見ても異様だった。

かつてこの橋では何が起きたのだろう。

太陽は容赦なく錆びた車や僕に降り注ぐ。

日差しの強いこのような日に、長い坂道を登るのは正直気が進まなかった。

陸橋を迂回し、路線バスのルートに沿って、僕は片側二車線の道を歩いて行く。

迂回した道に設置されたバス停の前にバスが停まっていた。

僕はとても驚いた。何で普段からこちらの道を使わなかったのだろう。

そのバスは他の車と同様に錆つき、ガラスは全て無くなっていた。

バスの側面の、かつて乗車口だったであろう枠から中に入った。

シートは全て取り払われ、無骨なフレームのみになっている。通路にはガラスが散乱している。

運転席を覗くと、ハンドルの上に制帽が一つのっかっていた。かつて運転手が身に着けていたものであろうか。

僕はそれの埃を払い、深く被るとバスを出た。

こここのバス停の名前はぜひとも覚えておこう。

町と町を往復している間のちょっとした楽しみにしよう。

紙と鉛筆を取り出し、バス停に記されている文字の形を写し取ろうとする。

ピュンという擦過音。

バス停の金属板が甲高い音を立てる。今まさに紙に写し取っている部分に綺麗な丸い穴が開いた。

ほんの少し遅れて聞こえてくる銃声。

狙撃。

バスの中に弾け飛ぶように身を翻し遮蔽物を確保、背中に背負っていたライフルを構える、ボルトハンドルを引き薬室に弾を込める。

ここまで経験と反射が命じるままに、無意識に体は動いた。

トトトトと先程のライフルとは別の銃声が響いた。

一番後ろの窓枠から、体が出る面積を最小限に抑えつつ様子をうかがう。

300メートルほど先、反対車線の道路を塞ぐように放置された車の影に三人の野盗がいた。

一人はボンネットに身を乗り出すようにしてライフルを構えている。

残りの二人は車の裏から当たる希望のない乱射をこちらに食らわせている。

弾は僕からだいぶ遠い所の路面を砕いている。

ずいぶんと腕が悪い野盗だ。

用心のため「四人目」を探したが、それもいないようだ。

深呼吸。

まずはライフル。

這ってバスの外に出る。そのまま歩道の枯れた植え込みまで進む。

ここからだとしてライフルを構えている野盗が見える。彼は全然見当違いの方向に狙いをつけていた。僕はもうそこにはいない。

スコープを覗きこむ、距離300メートル、南西の風、誤差を修正。

引き金を引く。

強い反動が肩に伝わる。十字線越しに見える血煙。すぐにボルトハンドルを引く。薬室から薬莢が弾け飛ぶ。次の弾が装填される。

ライフルを構えたまま眠ってしまったかのように、彼はそのままぐったりしてボンネットの上で動かなくなった。

すぐバスの中に移動する。僕がさっきまでいた所に大量の弾丸が叩きこまれている。

側面の窓枠から上半身だけ乗り出して、構える。

スコープ越しに見える二人は前後不覚に陥っているようだった。

一人が乱射しながらこちらに向かって走ってくる。なにか叫んでいる。

冷静に狙いをつける。胸に命中。

その男は走ってきた勢いそのままに後ろに吹っ飛んだ。

ボルトハンドルを引く。弾けた薬莢が地面に落ちる前に、車の裏の一人をスコープに捉え、引き金を引く。

ボルトハンドルを引く。二つの薬莢が地面に跳ねるこきん、こきんという音。

いつもの様に静かな町になった。

数時間たって、周りに待ち伏せがないことを確認してから、野盗の死体を確認しにいった。  
車の裏で倒れている死体を確認してから、ライフルを背中にかけた。  
ここにもバス停があった。血が跳ねている。

バス停がある光景。

僕が昔に抱くノスタルジーと、僕が今見ているこの光景の埋めがたい落差。

僕にとってバス停は、見たことのない平和な時代の墓標だった。

このバス停は、僕の人殺しの記憶の墓標になってしまった。

ここを通り過ぎるたび今日のことを思い出してしまうのだろう。

太陽は沈みかけていた。制帽を目深にかぶり、ズタ袋をもう一度背負い直す。紙が擦れ合う音がする。

ここを通ることは二度とないだろうと思った。

せっかくあんなに素敵なバスを見つけたのに。